

## 堀河本『後撰和歌集』の書き入れイ文について

著者	福田 孝
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	3
ページ	3-16
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000496/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000496/</a>

# 堀河本『後撰和歌集』の書き入れイ文について

福田 孝

はじめに

前稿「堀河本『後撰和歌集』について」<sup>1)</sup>において、その書写の実態を報告しながら混態の様相などを論じた。ここでは書き入れイ文の性格などについてまで言及できなかった。本論はその補遺である。

堀河本「後撰和歌集」にはきわめて多くの書き入れが施されている。総数は前稿での計上によると八二六箇所を数える。親本を書写した過程で生じた誤脱の訂正、すなわち親本の本文を校正する書き入れは二五四箇所である。他方、他の写本から相違する本文を書き入れたとおぼしい箇所も多くある。「イ」と称される本によつたと考えられる書き入れが五一五箇所・「正」を伴う書き入れが十一箇所である。これらからすると、見合させた他の写本は二本と思われる。また、以上とは別に傍書として処理することしかなき書き入れが四六箇所である。

「イ」と称される他本によつたと考えられる書き入れは五一

五箇所と数が多いため、「イ」伝本の本文の性質を確認することも可能となる。本稿では、「イ」と称される本文の性格について言及し、付論として「正」伝本の本文の性質について言及する。

堀河本は非定家本の後撰和歌集である。非定家本の本文を持ち全巻が現存している伝本は堀河本・雲州本・承保三年本系統の二本・伝坊門局本、これらしかなく、堀河本は非定家本の後撰和歌集の本文研究において重要な位置を占めている。書写者として比定される堀河具世の筆か否かは不詳だが、書写の時期は堀河具世と時期を同じくする十五世紀ころの筆跡と見られる。「イ」伝本の本文の性質を検討することは同時に堀河本の本文の性質をも浮かび上がらせることにも思われる。

## 一 イ本文の、諸本との親疎性など

書き入れの総数を表にして再提示する。同一歌へのイ文書き入れが二箇所なされている場合それを一つと数えるか二つと数

えるか、あるいは「イ」が付かないものの片仮名で書き込まれている場合に本文訂正のための書き入れとみるか「イ」の書き入れとみるか、のように判断に迷う場合など、数え方により小異が生ずる。前稿での扱い同様に、本稿でも「イ」が付いている箇所で一箇所と数える方法を取り、また堀河本の書写者が採用していると思われる原則①訂正の書き入れはひらかなを用いる・②「イ」による書き入れはカタカナを用いる、に従って計上を行なっている。結果、次の表1のようになる。

表1

	見消	訂正	補入	「イ」	「正」	傍書
巻1	0	7	4	7	0	2
巻2	0	1	3	5	0	0
巻3	1	5	5	5	0	2
巻4	1	3	0	15	4	1
巻5	0	6	2	6	1	1
巻6	0	9	1	19	2	2
巻7	2	11	0	50	0	1
巻8	0	6	0	25	1	0
巻9	3	2	3	36	2	3
巻10	2	7	4	50	1	5
小計	9	57	22	218	11	17
巻11	2	13	2	46	0	2
巻12	1	8	5	16	0	1
巻13	4	11	6	38	0	0
巻14	3	13	10	25	0	2
巻15	7	8	7	49	0	6
巻16	1	7	11	55	0	2
巻17	1	9	6	24	0	6
巻18	0	8	1	5	0	1
巻19	0	7	7	22	0	3
巻20	2	5	1	17	0	6
小計	21	89	56	297	0	29

表の「見消」「訂正」「補入」が親本の本文の誤脱等を校正するための書き入れである。堀河本の本文としてはこれらの書き入れを生かしたものを以下では使用する。

表の四列目に掲出している「イ」について見ていく。

まず他本との比較を行なってみる。前半の巻一〜巻十では二荒山本（略号は「二」、以下同様）・雲州本（雲）・承保三年奥書本（保）・伝坊門局筆本（坊）・定家天福年号本（天）の五本と、後半の巻十一〜巻二十では雲州本・承保三年奥書本・伝坊門局筆本・定家天福年号本の四本、との対比を行なった（汎清輔本の写本である二荒山本は巻十までの現存本文なので、後半では使用できない。また汎清輔本系統としてはほかに片仮名本が存在するが、ここでは二荒山本に代表させて対校をした）。

例えば、堀河本の本文状況が、

八 春上<sup>三</sup>ウ<sup>三</sup>の歌五「人のつむやと」  
ヘクイ

となっている場合、「ヘク」と同じ本文である場合は「イ」について1と計上し、堀河本の本文「やと」と同じ本文になっている場合は、「堀」について1として計上する、という計上方法を取った。このようにして作成したのが表2である。表2の「対校箇所数」とは、結局「イ」が書き込まれている箇所の総数のことであるが、事柄を分明にするため「対校箇所数」という言い方を用いた。

以下、表2から見えてくることを確認していく。

「イ」が書き込まれている箇所の数（＝「対校箇所数」）が巻

表2

	「イ」と一致する箇所数					「堀」と一致する箇所数					対校箇所数	天福本歌数	堀河本丁数
	二	雲	保	坊	天	二	雲	保	坊	天			
卷1	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	7	46	9
卷2	1	2	2	3	2	0	2	1	1	2	5	34	6.5
卷3	1	0	4	3	4	1	4	1	2	1	5	66	13.5
卷4	13	11	14	12	13	1	0	1	1	1	15	70	10.5
卷5	3	3	2	2	3	2	2	4	3	2	6	54	8
卷6	7	9	7	9	10	3	4	4	4	3	19	80	13
卷7	30	29	37	32	40	10	10	5	7	4	50	92	13.5
卷8	14	11	16	17	17	5	8	6	4	5	25	64	8
卷9	17	18	26	28	25	6	10	3	2	4	36	94	14.5
卷10	23	32	40	30	41	12	7	5	7	6	50	99	19.5
小計	112	118	151	138	158	43	50	33	34	31	218	699	
卷11		22	33	31	34		3	1	2	0	46	95	18.5
卷12		6	11	11	10		0	0	0	0	16	96	16.5
卷13		11	21	17	23		11	7	9	6	38	103	17
卷14		8	16	13	18		7	4	9	3	25	81	14
卷15		21	6	28	38		8	36	7	3	49	50	12
卷16		28	12	29	47		4	31	7	1	55	70	14
卷17		10	5	11	15		9	13	8	8	24	55	12.5
卷18		3	1	2	0		0	2	1	3	5	54	11
卷19		6	7	11	10		12	8	8	11	22	64	13
卷20		7	7	4	6		4	5	4	8	17	58	11.5
小計		122	119	157	201		58	107	55	43	297	726	

よって偏りがあるように見える。卷一から卷六までと卷十二それに卷十八・二十などは「イ」の本文が書き込まれている箇所が少なく、卷七から卷十一までと卷十三から卷十六までは「イ」の本文が書き込まれている箇所が多い。概して四季の部立である卷一から卷八についてはあまり多くなく（卷七「秋下」・卷八「冬」が例外となる）、卷九「恋一」から卷十六「雑二」までが「イ」の本文が書き込まれている箇所が多いように見受けられる（卷十七以降については堀河本が混態本であることが関係すると思われる、後述する）。

上冊（卷一～卷十）での、「イ」「堀」それぞれと一致する箇所数から見てみる。

「イ」については概して「二」「雲」「保」「坊」「天」の五本と一致することが多い。とくに定家本を代表する「天」ともっとも親しい。総数二一八箇所のうち一五八箇所が一致することがその親しさをよく証している。「保」についていうと、「保」の本文は卷一から卷一四の途中（105番歌あたり）までが定家無年号B類本と近しいと考えられ、それ以降が「保」本来の本文と見られる。上冊が定家本に近しい本文系統を持つと見られるとおり、「保」は「天」に次いで「イ」に近しい関係を持っている。こうしたところから「イ」の写本は定家本に近しい本文を持つているということができそうである。

また、以上に対して「イ」は「二」「雲」とはやや疎い関係にある。杉谷が『後撰和歌集諸本の研究』において、十九箇所

を挙げながら「この校異本文、とくに多量詳細にわたる「イ本」校異は、現存のどの系統本にも属さない別種の本文によるかと思われる。その本文は、清輔本の系統とは対立箇所が多く、堀河本よりもやや定家本の本文に近いようである。」と述べている。この最後の一文どおりの様相であるとおよそ思われる。

「イ」のこうした様相に対して、対校箇所「堀」の本文については概して「二」「雲」「保」「坊」「天」の五本とは疎い関係にある。一致する箇所がもつとも多い「雲」でさえ総数二一八箇所に対して五〇箇所と少ない。中でも「天」「保」とは疎い関係にあると言える。「堀」の本文は他の写本から屹立した独自本文を持つ箇所が多いと言えそうである。

「堀」が独自本文を持つ箇所が多いことを確認するために、表3・表4を作ってみた。例えば、巻四においては対校箇所は十五箇所であり、そのうち十一箇所において「二」「雲」「保」「坊」「天」とが「イ」と同じ本文を持つかたちになる。例えば、

シタイ  
168.四夏4ウ.40.歌二「山へにみつは」

——「山した」(二・雲・保・坊・天)

といった箇所である。上冊では全対校箇所数二一八に対して、半数近くの九九箇所「イ」が「二」「雲」「保」「坊」「天」すべてと一致もしくはほぼ一致する<sup>(6)</sup>。下冊ではあとで述べるように事情がありはするものの、やはり全対校箇所数二九七に対し

表 3

	五本すべてが「イ」とほぼ一致する箇所数	五本すべてが「堀」とほぼ一致する箇所数	五本すべてが「イ」「堀」いずれにも一致しない箇所数	対校箇所数
巻 1	2	3		7
巻 2	1		1	5
巻 3		1	1	5
巻 4	11			15
巻 5	1	1		6
巻 6	12	1		19
巻 7	25	2		50
巻 8	6	2	1	25
巻 9	17	1	1	36
巻 10	24	1		50
小計	99	12	4	218

表 4

	四本すべてが「イ」とほぼ一致する箇所数	四本すべてが「堀」とほぼ一致する箇所数	四本すべてが「イ」「堀」いずれにも一致しない箇所数	対校箇所数
巻 11	26		1	46
巻 12	7		1	16
巻 13	13	6	2	38
巻 14	13	3	1	25
巻 15	8	2		49
巻 16	12			55
巻 17	4	4		24
巻 18			1	5
巻 19	4	4	1	22
巻 20	2	2	1	17
小計	89	21	8	297

て約三分の一の八九箇所で「イ」が「雲」「保」「坊」「天」すべてと一致もしくはほぼ一致する。「堀」の本文が五本もしくは四本と比して独自本文を持つ箇所が多いことが知られる。

下冊（巻十一―巻二十）での、「イ」「堀」それぞれと一致する箇所数から見てみる。

下冊については事は単純ではない。下冊においても「イ」の本文が「天」ともっとも親しいことが、表2において総数二九七箇所に對して二〇一箇所が一致することから見てとることが出来る。が、巻十五・十六において「堀」が「保」と一致する箇所が格段に多くなる。三十七箇所と三十一箇所という数値である。前稿「堀河本『後撰和歌集』について」でも確認したように、「堀」が混態本であるらしいことに関わると思われる。すなわち、「堀」は、巻一から巻十四までが「堀」本来の本文であり、巻十五から巻十七の途中（二二―二五番歌）までが「保」に近い本文を持ち、巻十七の途中（二二―二六番歌）から巻二十の巻末までが定家本に近い本文を持つ、三種類の混態本であると見られるのである。表5に概要を示した。

混態本の様相に対応するように下冊に関して整理し直して作成したのが表6である。巻十一から巻十四までは上冊とほぼ同じような傾向が見える。すなわち、「イ」は「雲」「保」「坊」「天」の四本と総じて親しい関係にある。「天」と最も親しく「保」がそれに次ぐ。「雲」とはやや疎い関係にある。そして「堀」についてみると「雲」「保」「坊」「天」の四本のどれとも疎い

関係にあることが分かる。

巻十五から巻十七途中までは、「堀」は「保」とは総数一六箇所に對して七六箇所が一致しており、「堀」と「保」とが親しいことを見てとることができる。それに対して、「保」はここまで「イ」と一致することで定家本と近い系統の本文であることを見てとることができていたのに、この巻十五から巻十七の途中まででは「イ」と一致する箇所が極端に低くなる。上冊や巻十一から巻十四までで確認したように「イ」が定家本に近い本文であるとすると、「保」がこのあたりでは定家本とは疎い本文になっていることが分かる（事実、「イ」はこの巻十五から巻十七途中まででも総数一六箇所に對して九五箇所が「天」と一致しており、「天」と最も親しい本文を持っている）。また、このあたりでもやはり「堀」は「天」ともっとも疎い関係を持っている。

以上に対して、巻十七途中から巻二十にかけての状況は少し込み入ってくる。このあたり「堀」は定家本に近い本文を持つと考えられる箇所である。やはり同じ定家本に親しい本文を持つ「イ」と校合しても、本文に差が生じることはなく、「イ」が書き込まれることがなくなると考えられる部分である。「イ」が書き込まれる箇所が五十箇所近くにのぼる巻が巻七から巻十六の中にあつたのに對して、巻十七の途中から「イ」の書き込み数が減っているということはそのあたりの事情が反映していると思われる。そして「イ」「堀」どちらの本文も「雲」「保」「坊」「天」のどの本文とも格別に親しい位置を持たない。この

堀河本

卷一・卷二・卷三……………卷十・卷十一・卷十二・卷十三・卷十四・ 卷十五・卷十六・卷十七・卷十八・卷十九・卷二十  
 ┌─────────── 独自本文 ───────────┐ ┌─────────── 承保三年本系 ───────────┐ ┌─────────── 定家本系 ───────────┐

表6

	「イ」と一致する箇所数					「堀」と一致する箇所数					対校箇所数
	二	雲	保	坊	天	二	雲	保	坊	天	
卷 11		22	32	31	34		3	1	2	0	46
卷 12		6	11	11	10		0	0	0	0	16
卷 13		11	21	17	23		11	7	9	6	38
卷 14		8	16	13	18		7	4	9	3	25
小計		47	80	72	85		21	12	20	9	125
卷 15		22	6	29	38		8	37	7	3	49
卷 16		28	12	29	47		4	31	7	1	55
卷 17 (～1215)		6	1	6	10		3	8	2	1	12
小計		56	19	64	95		15	76	16	5	116
卷 17 (1216～)		4	4	5	5		6	5	6	7	12
卷 18		3	1	2	0		0	2	1	3	5
卷 19		5	7	10	9		12	8	8	11	22
卷 20		7	7	4	6		4	5	4	8	17
小計		19	19	21	20		22	20	19	29	56
計		122	119	157	201		58	107	55	43	297

あたりでは「堀」「イ」どちらも定家本に近い本文を持つとはいえ、他の四本のどれとも同一視できるほどには親しい関係を持つていない。「堀」「イ」ともに定家本に近い本文を持つわけだから、「堀」が「イ」と近い本文を持つならば、「イ」を書き込む必要が生じる箇所はもつと圧倒的に減ると思われるが、そうならないということは、同一系統とは思われるものの、「堀」と「イ」の本文には差異があると思われる。また「イ」の本文が圧倒的に定家本に近いのであれば定家本である「天」と一致する箇所が多いことになるが五六箇所中二十箇所しか一致する本文を持たないということは、定家本にたいそう近いということにもならないと考えられる。このあたり「堀」も「イ」も定家本と同じ系統の本文ではあるものの、定家本系統に大層親しいというわけではないと見ておく他ないように思われる。やはり、「イ」の本文は定家本に近いとはいえないものの、杉谷が言うように「イ本」校異は、現存のどの系統本にも属さない別種の本文によるかと思われる。」ということになるようである。

## 二 白河切の本文との比較

一節で作成した表と同様の表を、対応する白河切が残存する箇所を加えて行なってみる。白河切を略号「白」で示す。表7のようになる。白河切は巻一～巻十までしか存在が確認されていないため上冊での比較となる。また巻一・巻二・巻三・巻五には該当箇所がないため表から省いた。

「二」「雲」「保」「坊」「天」の五本について、一節で確認したこととはほぼ同様の傾向が見受けられる。「イ」は定家本系「天」「保」と親しい関係にある。「イ」は汎清輔本系である。「二」あるいは古本系と考えられる「雲」とは疎い関係にある、といった点である。また、「堀」は「二」「雲」とやや親しい関係にある。「堀」は「天」「坊」「保」とは疎い関係にある、といったことである。対校箇所数は一節の三分の一位になってしまいが、表7の数字は有意であると思われる。

表7からは、一致する箇所が三箇所であることから「イ」が「白」とは最も疎いということが見て取られる。すなわち一節を踏まえると「白」は定家本系からは離れた関係にあるらしいことが知られる。そして「白」と「堀」とは一致する箇所が二箇所であることから最も親しいということが知られる。杉谷が指摘する、「巻十までの二一四首（諸本の約三割）しか伝存しない古筆切」である「平安末期の書写になる白河切」の本文と堀河本の本文とが親しい関係にある、ということがこの表からも窺うことができる。

表4と同じような表8を作成しても同様な結果が得られる。やはり「堀」の本文が六本と比して独自本文を持つ箇所が多いことが知られる結果となる。

### 三 イ文書き入れは遺漏なくなされているか

イ文の本文の性格についてみてきたが、堀河本の書写者が

表7

	「イ」と一致する箇所数						「堀」と一致する箇所数						対校箇所数
	二	雲	保	坊	天	白	二	雲	保	坊	天	白	
卷4	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1
卷6	3	4	3	4	5	3	1	2	2	1	0	2	8
卷7	8	9	13	10	12	5	4	2	0	1	0	5	16
卷8	12	10	14	14	15	9	4	8	5	3	4	8	19
卷9	4	6	10	10	9	5	3	3	1	1	1	4	14
卷10	7	8	12	8	11	8	5	1	2	2	3	2	16
小計	35	38	53	47	53	31	17	16	10	8	8	21	74

表8

	六本すべてが「イ」と一致か ほぼ一致する 箇所数	六本すべてが「堀」と一致か ほぼ一致する 箇所数	六本すべてが「イ」「堀」いずれにも一致しない 箇所数	対校箇所数
卷4	1	0	0	1
卷6	6	0	0	8
卷7	8	0	0	16
卷8	3	2	0	19
卷9	4	1	0	14
卷10	8	1	0	16
小計	30	4	0	74

堀河本文

「イ」を十全に書き込んであるかどうかという点を確認しておきたい。「イ」と称される本によつたと考えられる書き入れは五一五箇所の多きにわたりはするが、イ本文文を採用することによつてイ本の写本の本文を再構成できるかどうか、堀河本書写者は堀河本とイ本との差異を遺漏なく書き込んであるかどうかということである。

卷一の末尾十首を確認してみる。堀河本の本文を上、イ本にもつとも近しいと思われる天福本の本文を下に書き出し、堀河本と天福本とが異なっている箇所について堀河本のほうに傍線を付す。異文の箇所は少なく数えても四十箇所ほどのぼるとくに三八・四五・四六番歌などに作者名の問題箇所がある。三九番歌が脱落している、といった問題がある。三八・四五番歌の作者名は「二」「雲」「保」「坊」でもそれぞれ「朱雀院の兵部卿のみこ」「つらゆき」に比定できる作者名になっており、四六番歌は作者名がなく四五番歌「つらゆき」を適応する書き方となっている(ただし「坊」のみ四五番歌「つらゆき」、四六番歌「紀貫之」。四六三九番歌は「二」「雲」「保」「坊」にも存在する。おそらくは「イ」でも「天」と同様になっていた可能性が高いと思われる。にも関わらず、実際にイ文が書き込まれているのは、二重傍線部の一箇所のみであり「ヒイリイ」が付されている。その下の波線部「の」に「に」・四三番歌の詠み人の読みとして「夕」の傍注がなされているだけである。以上からすると、堀河本書写者は遺漏なくイ文の書き入れを行なったわけではなさそうである。どうという判断規準にした

君がため山田の沢にそくつむとぬれにし袖はまたもかはかず

あひしりて侍りける

人の家にかまかりけるまへに梅の木侍りけり

このはなさきなんむ時

かならずせうそくせむにまうてこと

いひて

をとなく侍りければ

中納言紀長谷雄

むめの花いまはさかりになりぬらむたのめし人の音つれもせぬ

春人の家において

よみ人しらす

むめのはな散といふなへに春雨の降出つなく鶯のこゑ

かよひすみ侍りける人の

家なる柳をおもひやりて

凡河内躬恒

いもか家のはひりにたてる春柳のいまや鳴らむうくひすのこゑ

松のもとにこれ侍りて

花をみつかはしける

坂上是則

天福本文

君がため山田のさはにそくつむとぬれにし袖は今もかわかず37

あひしりて侍りける

人の家にかまかれりける、梅の木侍りけり、

この花さきなん時、

かならずせうそくせむと

いひ侍りけるを、

おとなく侍りければ

朱雀院の兵部卿のみこ

梅花今はさかりになりぬらんなのめし人のおとつれもせぬ38

返し

紀長谷雄朝臣

春雨にいかほ梅やにほふらんわが見る枝は色もかはらず39

春の日、事のついででありてよめる

よみ人しらす

梅花ちるてふなへに春雨のふりてつなくうぐひすのこゑ40

かよひすみ侍りける人の

家のまへなる柳を思ひやりて

みつね

いもか家のはひりにたてるあをやぎに今やなくらん鶯の声41

松のもとにこれ侍りて

花をみやりて

坂上是則

ふかみとりときは松の陰にめて  
うつろふ花をよそにこそみれ

藤原雅正

花の色はちらぬ間ばかりふるざとに  
つねには松のみとりなりけり

むめのはなをみて

凡河内躬恒

くれなゐに色をはかへて梅の花  
かそことくにはほざりける

かれこれまとゐして

さけられたへけるまへに  
梅花に雪のふりかゝりけるに

ふる雪はかつも消なむ梅の花  
更にまとはて折てかさゝむ

兼輔朝臣

ねやの前にさくらを  
うへて侍りける

二年ばかり花さかて  
かれすにのみ侍りけるを

三年のうちに  
花さきなとせりければ

女ともその枝をおりて  
みすのうちより

これはいかゝみゆると  
の給ひいたしたりければ

紀貫之

春ごとにさきまさるへき花なれば  
ことしをもまたあかずとそみる

はじめて宰相になりて侍りける  
としになむ侍ける

ふか緑ときは松の影にめて  
うつろふ花をよそにこそ見れ 4 2

藤原雅正

花の色はちらぬまばかりふるざとに  
つねには松のみどりなりけり 4 3

紅梅の花を見て  
みつね

紅に色をばかへて梅花  
かそことくにはほざりける 4 4

かれこれまとゐして

さけられたうべけるまへに、  
梅の花に雪のふりかかりけるを

つらゆき

ふる雪はかつもけなむ梅花  
ちるにまとはず折りてかささん 4 5

兼輔朝臣

ねやのまへに紅梅を  
うゑて侍りけるを

三とせばかりのち  
花さきなどしけるを

女どもその枝ををりて  
すのうちより

これはいかかと  
いひいだして侍りければ

春ごとにさきまさるへき花なれば  
ことしをもまたあかずとぞ見る 4 6

はじめて宰相になりて侍りける  
年になん

がったものか明確にはし難いが、堀河本の本文と「イ」本の本文とを見比べながら書写者自身が必要と思われる箇所「イ」文の書き入れをしていったと考えられる。ここに見るように たった十首だけでも歌の出入りや読み人に差異が生じ四十箇所 に及ぶ書き込みを行なわなければならなくなるわけであるから、イ本の本文を遺漏なく書き入れる煩雑さを考えるならば、別にイ本を書写した方がたやすいことになってしまう。解釈上において堀河本とは異なる理解が可能となるような目に付く箇所について、いわば恣意的に適宜イ文書き入れを施していったというのが堀河本における「イ」文書き入れの実態のように思われる。

こうしたことと関連すると思われるのが、「 $\setminus$ 」の付されている「イ」についてである。二例を挙げる。

「一春上 $\setminus$ ウ」の歌三「引にくる」の「くる」右に「 $\setminus$ ユク」。

「一春上 $\setminus$ オ」の歌五「老をこそつめ」の「老」の右に「 $\setminus$ トシイ」。

以上のように「イ」の本文のうえに合点が付されている箇所が全部で六十二箇所ある。「イ」の書き入れ箇所が全部で五十五箇所であるから約一割の箇所「 $\setminus$ 」の合点が付されていることになる。「イ」の本文を採用するのが好ましいと書写者が

判断している場合に付されていると推測される。異文箇所すべてが遺漏なく書き込まれているわけではないところから「堀」の本文と「イ」本の本文とを見比べながら書写者自身が必要と思われる箇所に「イ」文の書き入れをしてみたと考えられると述べたが、そのうえに「イ」の本文の方が好ましいと判断できる箇所に「／」が付されていると思われる。

「／」を伴う「イ」が書き込まれた歌の歌番号を巻毎に列挙すると表9のようになる。下冊に多い。

表9

	歌番号	箇所数
卷1	7.9	2
卷2		
卷3		
卷4	180. 189	2
卷5		
卷6	288	1
卷7	394. 408. 408. 438	4
卷8	454. 458	2
卷9	545. 571. 576. 587	4
卷10		
小計		15
卷11	753. 761	2
卷12	826. 864. 883. 885	4
卷13	917. 922. 927. 967. 970. 970. 976. 982	8
卷14	1043. 1068. 1069	3
卷15	1075. 1076. 1089. 1095. 1097. 1098. 1119	7
卷16	1128. 1131. 1140. 1147. 1155. 1155. 1188. 1189. 1193	9
卷17	1201. 1232	2
卷18		
卷19	1308. 1314. 1318. 1324. 1351. 1359	6
卷20	1377. 1377. 1391. 1412. 1416. 1423	6
小計		47

## まとめ

前稿にて、堀河本は、証本を作成する目的や美しい調度品を作成する目的ではなく、手沢本として『後撰和歌集』を熱心に読もうとする目的を持つているものと見えると述べた。本稿によってそのイ本の書き込みの実態を更に明らかにし、イ本の本文の性格についても確認してみた。

イ本の本文は定家本、とくに「天」に近いことを一節で指摘した。しかし、完全に定家本に一致するわけではない。「イ」が「堀」とも「二」「雲」「保」「坊」「天」とも異なる本文を持ち、「イ」の本文が孤立する場合がある。九例すべてを挙げておく。

555 九恋一・10オ・98 歌三「ふるしえに」の「しえ」に右傍書「タヒイ」、この右傍書の「ヒ」にまた右傍書「モへ」（これでイ文「ふるしたもひに」とイ文「ふるしたもへに」を表示すると思われる）。

573 九恋一・12オ・100 歌四「うらみやすくも」の「うらみ」に右傍書「ロ、ロイ」。

745 十一恋三・10ウ・143 歌一「わたの浦に」の「の浦に」に右傍書「ツミノイ」。

875 十二恋四・14ウ・166 詞書「ければしとあたりけるにかはしける」の「しとあたりけるにつかはしける」に右傍書「ツカハシケルイ」。

919 十三恋五・6オ・174 歌三「なつかしき」の「き」に右

傍書「ミイ」。

937. 十三恋五.9オ.177.詞書「とせたれば」の「た」に  
右傍書「ケイ」。

1005. 十四恋六.2ウ.188.詞書「わたりければ」の「たりけ  
れば」に右傍書「タシツ、イ」。

1267. 十八雑四.5オ.243.詠人「小町かめい」の「めい」に  
右傍書「姉イ」。

1370. 廿慶賀.1ウ.264.歌二「我なきそへて」の「き」に右  
傍書「ライ」。

こうしたところから見ても、やはり「イ」の本文は定家本系  
に近いというものの、まったく定家本に一致するわけではな  
く、定家本に親しい本文を持っているとだけ言える。本論では  
「天」の淵源となったと考えられる定家本無年号本B類との比  
較は行なってこなかった。しかし「保」は巻一から巻十四の途  
中までは無年号本B類の本文に近いものと考えられるものであ  
る。定家本に親しくしかも「天」に一致するわけでないという  
ことは、定家が手をより加えた「天」よりはその淵源となった  
無年号本に親しい可能性が高いと予想されるのだが、表2から  
すると「イ」は「天」にもっとも親しく、無年号本に近い「保」  
に次に親しい性格を持つと見え、その一方で「天」とは全く違  
う箇所も保持しているという性格を持つということになる。

「イ」の本文の持つ奇妙な性格を指摘することができる。  
また、本論からは、堀河本の本文が他本から孤立する独自性

を持つこと・堀河本が三種に大別できる混態の様相を持つこ  
と・堀河本と白河切とが親しい関係にあること、以上をも再確  
認できているように思う。

(1) 福田孝「堀河本『後撰和歌集』について」『武蔵野大学日本文  
学研究所紀要』第二号、2015年。

(2) 杉谷寿郎「後撰和歌集諸本の研究」をもとにした『後撰和歌集』  
諸本の系統は注(1)に示した。

(3) 本稿でも前稿と同様に、堀河本における書き入れの所在等は「新  
編国歌大観番号」巻数と部立各巻での丁数とウラかオモテか電子  
資料のコマ数現象。」で必要に応じて示す。

以下、実見したところより「イ」の書き込みがいつの段階でな  
されたものかについて言及する。

次の「イ」箇所は墨色が本文よりあきらかに薄い。

二「春上ヤオ」詞書「立春哥とて」の「立」の右に「早イ」。

歌二「あや吹みたる」の「吹みたる」の右に「ヲリトクルイ」。

42「七秋下」詞書「風の音は」の「は」に右傍書「ノ  
イ」。

歌三「とめつらむ」の「と」に右傍書「セイ」。

63「十恋二」ウ.116.詠人「在原しけもと」に右傍書「藤原滋  
幹イ」。

歌五「なきこゝちすれ」の「すれ」に右傍書「セ  
シイ」。

次の「イ」箇所は墨色が本文よりあきらかに濃い。

369. 七秋下.4オ.71.歌一「秋の、」の「、」に右傍書「ハイ」。

歌二「にしきとのみも」の「とのみ」に右傍書「ノコトイ」。

371. 七秋下.4オ.71.歌五「色とれる草」の「とれる」に右傍書「カハルイ」。

376. 七秋下.4ウ.72.歌四「やまの」の「の」に右傍書「ソイ」。

歌五「にしきなりけり」の「な」に右傍書「マイ」。

また、下冊冒頭あたりにおいては、誤脱訂正の「72. 十一恋三.4オ.136. 詞書「めしかへされければ」の「に」に「に」を挿入指示。」や本文に比すと、次の「イ」箇所はあきらかに薄い。

700. 十一恋三.1ウ.134. 歌一「名にしほへは」の「へ」に右傍書「ハイ」。

701. 十一恋三.1ウ.134. 詠人として700と701の間に「在原元方イ」を小字挿入指示。

709. 十一恋三.3オ.135. 詠人「中務」の右下小字「本院侍従イ」。

710. 十一恋三.3ウ.135. 詞書「しのひて侍ける時」の「に」に右傍書「カタラヒイ」。「四五さいはかりなる本院の」の「に「カイ」を挿入指示。

こうしたところからすると、「イ」の書き込みは本文とも誤脱訂正書き込みとも違う段階でなされた可能性が高い。

(4) 福田孝「承保三年奥書本『後撰和歌集』について」『和歌文学研究』101号 平成二十二年。

(5) 杉谷寿郎「後撰和歌集諸本の研究」笠間書院、昭和四十六年。「第二章 古本系統 第一節 (二) 堀河具世筆本」の注(2)における言及。

(6) ハジメ「はほ」と言っているのは、376. 七秋下.4ウ.72. 歌四「やまの」の「の」に右傍書「ソイ」。

↑二「やまぞ」・雲「いまぞ」・保坊「いまぞ」・天「今ぞ」  
379. 七秋下.5オ.72. 詠人「源宗平」の「宗平」に右傍書「宗平」  
于イ。

↑二「みなもとのむねゆきのおそん」・雲保坊天「源宗于朝臣」  
といった例である。

(7) ここで扱った白河切の本文は、

小松茂美「後撰和歌集 校本と研究」誠信書房、昭和三十六年で翻刻紹介されている九三葉(二一四首)と、

注(5)一六七頁で紹介されている歌576・577・597・598・599・635の六首、

それに小松茂美監修『日本名跡叢刊89』内「白河切後撰集」二  
女社、1984内で『校本と研究』に載らない歌131・132・396・  
397・398・505・506の七首、である。

(8) 注(5)の書物。

(9) 本論からは、その出版時には未発見で杉谷『後撰和歌集諸本の研究』では扱われていない「伝坊門局本」の本文の位置もいくらかは示すことができているように思う。「坊」の位置は、「天」「保」と「雲」との間にあると言える。

「イ」の位置が「天」にはほほ一致する位置にないとすると、「保」や「坊」に近い位置になりそうなのだが、そうではなく「天」が一番近い。この事態を上手く説明するためには、「イ」は一本ではなく、「天」一本を主としながら他に非定家本系の本文が同じく「イ」として書き込まれた可能性、もしくは非定家本系の本文が書き込まれた「天」を用いて異文も「天」の本文も同じく「イ」として書き込まれた可能性、を考えるのがよいのかもしれない。

本文としては以下を使用（括弧内が使用略号。歌番号は新編国歌大観番号を使用）。

二荒山本（二）…小松茂美『日本名跡叢刊 二荒山本後撰和歌集 上下』二玄社

堀河本（堀）…国文研 電子資料館 マイクロ／デジタル目録DB [100061314 八代集]

雲州本（雲）…久曾神昇・深谷礼子『後撰和歌集（雲州本）と研究』未刊国文資料刊行会

承保三年本（保）…『天理図書館善本叢書69 後撰和歌集別本詞花和歌集』

伝坊門局本（坊）…片桐洋一『後撰和歌集 伝坊門局本』和泉書院

天福本（天）…『新編国歌大観 勅撰和歌集』角川書店

付…「正」の書き込み本文について

堀河本に書き込まれた他本の一本として「正」の記号が付されているものもある。十一箇所だけである。まずそのすべてを書き出す。

179. 四夏 6才. 41. 歌二「我身やまへの」の「へ」に右傍書

「正シ」。

208. 四夏 10才. 45. 歌四「なくことかたき」の「き」に左

傍書「正シ」。

208. 四夏 10才. 45. 歌五「こ、ちしこそすれ」の「れ」に

右傍書「ル正」。

212. 四夏 10ウ. 46. 歌四「物うかる音は」の「る」に右傍

書「ク正」。

238. 五秋上 5才. 51. 詞書「たなはたをよめる」の「を」に

右傍書「ニ正」。

287. 六秋中 4ウ. 59. 歌四「我はつれなき」の「は」に右傍

書「モ正」。

327. 六秋中 10ウ. 65. 歌二「秋やゆくらむ」の「ゆ」に右

傍書「カ正」。

453. 八冬 2才. 83. 詞書「増基法師」の「基」に右傍書「喜正」。

542. 九恋 1. 7才. 96. 歌五「物にそありける」の「あり」に

右傍書「ヨリ正」。

561. 九恋 1. 10ウ. 99. 歌五「なるそかなしき」の「かな」

に右傍書「ワヒ正」。

699、十卷二、19才、125、歌五「色にもならねは」の「色」に  
右傍書「もの正」。

巻四に4例、巻五に1例、巻六に2例、巻八に1例、巻九に2例、巻十に1例を見る。巻七にも「正」の書き込みはないのではっきりしないが、ひよつとすると巻一・二・三は欠いてゐるのかも知れない、少なくとも二荒山本・片仮名本・白河切などと同様に巻一〜巻十までしか存しなかつた本とは見られると思われる。これほどに書き込みの数が少ないのが不審である。

巻一〜巻十までの「正」完本を手元に置いて対校したものでなく、抄出されたもの或いは他本に書き込まれたもの等から書き込まれたといった可能性を考えるべきであろうか。

これまでと同様に、「二」「雲」「保」「坊」「天」「白」と、「正」「堀」との距離を見るための表を作成してみる。合致する箇所には○印を入れた。212番歌は「二」は「ものうくあるみは」とあるもの、453番歌は「二」「雲」「保」「坊」「天」では作者名として書かれているもの、を用いた。

表から見ると、「正」は「二」すなわち汎清輔本系に近い位置を持つように思われる。といつても古本系に入れられる「雲」と近いわけではない。たつた十一例なので詳細は知られないというべきであろうか。

	「正」と一致する箇所数						「堀」と一致する箇所数					
	二	雲	保	坊	天	白	二	雲	保	坊	天	白
179						—	○	○	○	○	○	—
208-1						—	○	○	○	○	○	—
208-2						—	○	○	○	○	○	—
212	○					—		○	○	○	○	—
238						—						—
287	○							○	○	○	○	
327							○					○
453									○	○	○	
542							○	○	○	○	○	○
561	○	○				○			○	○	○	○
699	○					—		○	○	○	○	—
計	4	1	0	0	0	1	5	7	9	9	9	2